

〈新刊紹介〉

松浦章著，鄭潔西等翻訳

『明清時代東亞海域的文化交流』

(江蘇人民出版社(南京)，2009年11月刊，A5版，364頁，26元)

楊 蕾

—

東アジアには中国大陸と朝鮮半島，日本列島，台湾島などに包含される渤海，黄海，東海，台湾海峡などが存在している。これらの海域では古くから船舶を利用して航行し，諸国相互の文化交流に寄与してきた。2009年11月に刊行された松浦章氏の『明清時代東亞海域的文化交流』（『明清時代における東アジア海域の文化交流』）は，この広大な海域で行われた文化活動について特に，14世紀から20世紀初期にかけての時期を中心に論述し，「海域アジア」の視点から研究したものである。本書は五編に分けられ，明清時代の中国を中心とした東アジア海域で行われた直接的な文化交流の実態を究明している。なお構成は以下のとおりである。

序論 海洋史からみる前近代東アジアの海上交流

第一編 明代の海外交流

第一章 鄭和大航海の随員

第二章 明代における諸外国の通事

第三章 嘉靖十三年における朝鮮使者と琉球使者の北京での接触

第四章 万曆四十五年の暹羅国の遣明使－明代の朝貢体制について－

第二編 明末清初の海外交流

第一章 袁崇煥と朝鮮使者

第二章 椴島占拠における毛文竜とその経済基盤

第三章 明末清初における中国商船によって日本に伝わった海外情報

第四章 満文檔案と清代日中貿易

第三編 清代の東アジア諸国の相互認識

第一章 江戸時代の資料にみえる清人画像資料

第二章 琉球の使者が見た清代の北京

第三章 清代の沿海商船の船員が見た日本－中国帆船の漂流記録を中心にして－

第四章 朝鮮使者が得た台湾と琉球の情報

第四編 清代における中国情報の海外伝播

第一章 康熙年間における武昌兵変に関する情報の日本への伝播

第二章 乾隆年間における山東王倫の武装蜂起に関する情報の日本へ伝播

第三章 道光十一年の湖南の趙金竜の反乱に関する情報の日本への伝播

第四章 『遐迹貫珍』にみえる近代東アジア世界

第五編 清代の海外華人と華商

第一章 清代前期の海外移民

第二章 来日清人と日中文化交流

第三章 清末民国初における福建の海外移民

第四章 辛亥革命と神戸華商

あとがき

二

第一編は、鄭和、海外通事、琉球使者、暹羅国（シャム国）から中国明朝への使節である遣明使などを中心に、明代の海外交流に関した人物等の事跡を述べている。特に鄭和大航海という膨大な先行研究が存在する問題に対して、中国第一歴史檔案館に所蔵される『武備選簿』を利用して、新しい視点から、随員たちの姓名と事跡、彼らの行動の実態を復元している。加えて、『武備選簿』の中外関係史研究に関する史料としての意義も明らかにする。また、東アジアの朝貢体制についても、明朝の朝貢国である朝鮮と琉球の使者が、嘉靖十三年（1534）到北京で出会ったという具体的な事例から先行研究と異なる視点で当時の交流状況を述べたことは、今後の明朝の朝貢の問題を考える際の新鮮な視点となろう。

第二編は、明末に東北地方で後金軍の南下を阻止していた袁崇煥と朝鮮使者の関係、天啓年間における毛文竜の渤海の椴島占拠、中国商船によって日本に伝わった海外政治情報、満族文字文書を通しての清代日中貿易など、明末清初における中国と海外の交流状況が述べられている。特に第二章では黄海東北の朝鮮の皮島を占拠した毛文竜を研究対象にし、彼の事跡をまとめた『毛大將軍海上情形』を利用して、毛文竜と明または後金との関係を述べている点は注目に値する。また、第三章では中国、日本、朝鮮の間における政治情報の伝播と交換についての中国商船が担った役割を明らかにしている。

第三編は、江戸時代の書籍にみえる清人画像、琉球使者が見た北京、商船船員が見た日本、朝鮮使者が得た台湾と琉球情報など、清代における東アジア海域の各国の相互認識を述べる。特に本編の第一章は、中国の史書には殆ど見られなかった清代の庶民たちの画像を日本の江戸時代の文献から抽出した。また、第三章では中国帆船の漂流記録を中心にして、清代の民衆の日本に対する印象などが述べられている。第四章は、朝鮮側の史料を利用して、北京で会った朝鮮使者と琉球使者が相手の情報をどうやって収集したかが明らかにされる。

第四編は、康熙年間における武昌兵変の日本伝聞、乾隆年間における山東王倫の武装蜂起の日本伝聞、道光十一年における湖南趙金竜反乱の日本伝聞、『遐迹貫珍』からみる近代東アジアなど、中国情報の海外伝播の状況を明らかにした。本編における最初の三章は中国で起こった武装

蜂起に関する情報が、どのように日本に伝播したかについて述べている。特に第一章では清代の野史も史料として研究に利用できる可能性があることが指摘される。第三章は中国史料と、日本の『唐船風説書』とを比較し、中国の反乱情報の日本伝播の経緯を考察する。また、第四章は1853年から1856年にかけて香港で刊行された雑誌『遐迩貫珍』を利用して、当時の東アジア世界の情勢を究明する。

第五編は、清代前期の海外移民、来日清人と日中文化交流、清末民初における福建の海外移民、辛亥革命と神戸華商の関係などから清代において海外へ渡航した華人と華商に関するどのような問題点があるかを明らかにしている。第三章では、日本領事報告の分析を通じて、海外へ移民していった華商の状況を述べる。第四章では、神戸で発刊された日本新聞『神戸又新新聞』を基本資料にして、辛亥革命が起こった時、神戸に滞在していた中国商人が中国の政治変動にどのように対処したかなどを解明する。

以上のように、本書は、明清時代の東アジア海域世界を研究対象にして、東アジア各国の史料を利用して、中国の帆船を媒介者としての文化交流の具体的な実態を考察している。

三

本書は、従来の文化交流研究と違い、海上で活動した船・人・物を切り口とし、帆船を通じた東アジア各国への情報伝播、東アジア各国の相互認識、中国の海外移民などの問題を取り上げている。このように文化交流の実態を具体的に究明していることが本書の特徴である。もう一つの特徴は、史料の発掘とその利用方法の提示であろう。例えば、第一編では中国第一歴史檔案館に所蔵された『武備選簿』及び『福州右衛選簿』、『天津衛選簿』、『錦衣衛選簿』や、当時の地理書である『海塩県図経』から鄭和の大航海に関する史料を見つけ出し、その随員の状況を明らかにすることで、これまでの鄭和研究になかった新しい課題を発見している。ほかには、第三編で日本側の風説書や版画などから清人の画像を紹介し、中国の庶民等の写実的な画像は、特に清代中国の社会生活史研究にとって貴重な史料を提供している。第四章では『華夷変態』を利用し、中国の正史に記されなかった情報交換の媒介となった中国商船の役割を究明した。また『遐迩貫珍』や『神戸又新新聞』など、雑誌と新聞から当時の東アジア海域で行われた文化交流を考察している。

なお本書は、中国で有名な学術著作シリーズ『海外中国研究叢書』の一冊として出版された。このシリーズは、1988年に中国で出版が開始されて以来、今まで既に22年が経過している。主に中国以外の国々の「中国研究」で優秀な研究成果を中国の学術界に紹介していることで有名である。これによって、20世紀80年代から中国人は外国研究者たちが描いた中国諸像を通じて、二重の視点の下で全面的に中国の歴史、思想、社会、文化などをじっくり認識できるようになった。80年代以前の「知識閉鎖」から解放された中国学術界にとって、このシリーズは重要な意義をもっている。

『海外中国研究叢書』は、既に100冊余りが出版され、主に欧米の研究者の著作を多く収録す

る。その中でも海外中国研究の拠点と言われるアメリカの研究者の著作は全体の80%以上を占める。ただ、21世紀に入ると、日本の中国研究に注目して、斯波義信氏（『宋代江南経済史研究』、2001年1月）、佐藤慎一氏（『近代中国的知識分子與文明』、2006年5月）、溝口雄三氏と小島毅氏（『中国的思惟世界』、2006年8月）、浜下武志氏（『中国近代経済史研究』、2006年11月）、島田虔次氏（『中国近代思惟挫折』、2008年4月）など、日本人研究者の代表作を翻訳し次々と中国で出版した。これらは主に古代・近代の中国思想と経済を研究対象にした研究であった。日本の研究者の特徴は、「日本人の目で見た中国史」と言われるように、日本人の視点から中国を研究することである。加えて、日本人研究者は中国史全体を俯瞰する大局的な視点から、個々の問題点を考察する。彼らのこのような姿勢は中国学界を啓発し、影響を与えている。

本書が『海外中国研究叢書』シリーズに加えられた理由は、21世紀に入ってから、「海」を対象とした研究が漸次盛んになるにしたがい、一国史の束縛から離脱した「海域アジア史」という視点から、中国と周辺の数々の国々との交流を研究することが盛んになったことが大きい。松浦氏のように、外国人の立場から中国を中心とした東アジア海域の文化交流史を総体的に研究した例はこれまでほとんどなかった。この新しい研究視点と研究方法を中国の学界に紹介することこそ本書が『海外中国研究叢書』として出版された意義であろう。

ただし、本書は松浦氏が1986年以来中国大陆と台湾で開催された国際シンポジウムにおける報告を中国語に翻訳した論文に基づいて編集された著作である。そのため翻訳には多くの人が関与しており、訳文や訳語など用語があまり統一されていない箇所が見られることが本書の欠点と思われる。

最後に、松浦氏のように国際的な学術交流に熱意を持って取り組む研究者たちの増加は、東アジアにおける歴史研究のグローバル化の発展を促進させ、研究の更なる国際化を促すと思われる。本書はこのような傾向を示唆する書物と言えるであろう。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程）